

望ましい猪猟犬の育て方

あるハンターの私見

神奈川県 田宮 治



つなであやつる様に指示伝達する

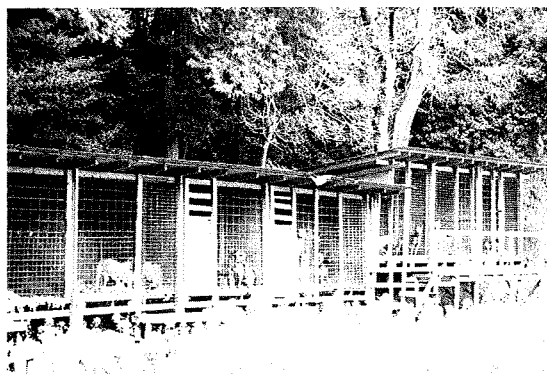
◎訓練の「し」「つ」「つ」「は」

親の年収が1千万円。これは最近新聞で発表された東大生の親に対する記事である。どんなに優れた逸材であっても「時をかけ、お金をかけ」そして何よりも「挑戦心を持ち続け」ない事には決して美しくは咲かないのである。

当然の事であるが猪犬訓練においても基本的に「あたり前の事を、あたりまえにやり続ける事」である。人が生きるには必要なものが「衣」「食」「住」であり、人格の形成には教育があり、それによって社会生活に大切な「常識」が身につくのである。

猪犬だって全く同じである。天性ある「原石を磨きあげる事」。訓練とはくり返し教えることであり、主人の手(心と手まひま、お金に至るまで)がどれだけかかっているかと言う事である。どんなにすぐれた原石であろうと「つなぎばなし」では光るはずもない。子犬を信じ、じっくりと育て上げる、これ以外ないのである。

愛犬にかける思いで訓練以前の事項になるが「犬舎」である。犬だつてまず健康第一である。やれ水洗いの、コンクリートにタイ



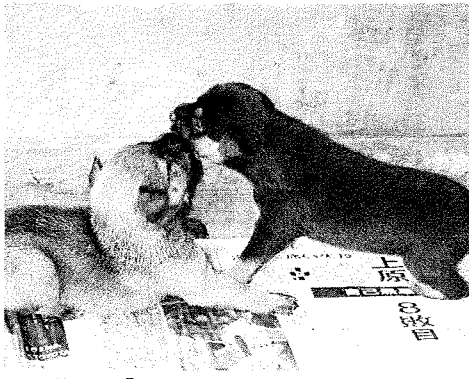
我ケ家の猪犬達と犬舎(自作)

張りなどと、人目からはどんなに立派な犬舎でも目の当たらない、じめじめした所ではどうしようもない。犬舎の条件で一番なのが風通しと日当たりである。1日ひなたぼっこ出来る様な犬舎であれば最高であり、たいいていの病気は心配ない。

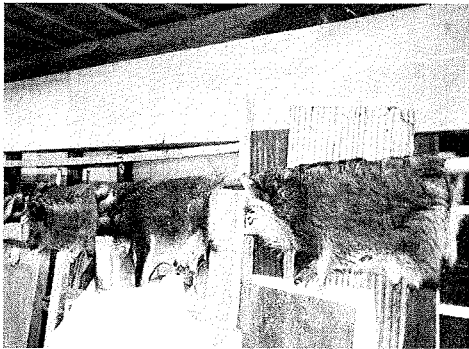
さてそれでは「原石」であるが、何度と言う様だが必ず自分の目で見定め「ほれ込んだ子犬」である事なのである。子犬を信じ、ただひたすらその子犬にかけるのが訓練の基本である。運よく一流芸に仕上がれば愛犬は10年以上も楽しさを共にするからである。



「愛こそ」子犬育てのポイントである



訓練の「い」はこのぐらいで(2カ月)



とった猪は皮にして、子犬の訓練に使っている様だ(四條家)



左より富士号・和号(牝)子犬の「しつけ済み」

これは「ほれこんだもの」でなくてはならないはずである。ふり返り見る我が人生ではあるが「ほれこんでいればこそ」どんな苦境でものりきれるものである。あくまでも俺流の考え方であり、やり遂げる方法ではあるのだが、猪猟の主役が犬である以上、子犬を一流犬芸に仕上げるのは言うまでもなく訓練である。上手に訓練した愛犬あればこそ、猪猟の醍醐味も楽しめ猟友の和も広がるのである。

しかし昨今、子犬を分譲する様になってつくづく思い知らされる事が実に多いのである。どんなに優れた逸材であったとしても、そうたやすく名犬に仕上げられるものではない。ましてや、これから単独猟をはじめようかとか、猪犬を仕上げているかと言う事であれば、むしろ出来なくて当然なのかも知れない。だけどそれでは丹精こめて作った子犬も、せつかく志した猟人にも、残念だしもつたいないと思うのである。

そんな事で、なんとか「名犬」にたどりついて頂きたい。その為には達人からすれば何でもない事、当然の事。しかしながら子犬を教え導くには「一番大切だ」と思う事を述べて見たいと思つたのである。

それでは訓練の「い」である。とつてくつつけた様であるが「訓練」であるが「訓」とはならず、事である。まず読んで字のごとく、子犬に一番はじめにしてやる事は、主人になれる事をして上げる事である。訓れもしないうちにあせつてやるつなびきや訓練とおぼしきものは、全て子犬からして見れば、何の面白味のない強制されたいやな事である。充分に訓れ親しみ信頼される主人と認めてもらつてから子犬に対し「練」つまり練習を重ねる事が基本である。

子犬に対する思いが強すぎてか送つたその日に犬箱から無理にひき出し「咬まれた」と言う様な考えられない話まである。子犬は3カ月位ではつきり主人を見わけける様になる。なれない空輸などで恐れびくついている。そんな時、無理にひき出せば「歯もかける」かも知れない。

やさしい言葉をかけながら、よしよしと前足2本を左手でつかみ、首ひもに右手をそえてそつとひき出せば、そんな事は決してしないはずである。それでもいやがる様だったら「箱に入った」ままで広い犬舎に入れ、トビラをひもで開いて出て来るのを待つ事である。

子犬であれ成犬でも、こんな時は目つきや態度で危険などはすぐ判別出来るはずである。ちなみに成犬の場合は犬箱に入ったままで1週間も食せず他人(主人)を認めないものである。

完全に猟が出来るまでには、2、3年もかかる場合もあるのだが、これらの事も含め、しんぼう強く

「待ち」「誨らし」「教える」事が大切なのである。子犬・成犬をとわず、はじめて見る主人は言ってみれば「他人」なのである。根は「そんな悪性はない」と言っても犬なのである。いやな事はいやであらうし恐いと思うにちがいない。「そんな事はわかってる」と言われる方も多いと思う。私もそう思っていた。しかしそんなあたりまえの「獵人としての常識」さえもわかっていない現実をいやと言う程つきつけられている。

せつかくの子犬、そして志した事は大切に育ててほしい。子犬は3カ月位から覚えた事は生涯それを忘れない。その反面、この頃にされた主人の「心ない一つの事」で「ダメ犬」になる事も知って頂きたい。

「名犬に仕上げる」と言ってみたとところでその道は定かでない。人それぞれの信念に基き、目標を目標せば良いのであるが、その中で大切なのは「子犬が喜ぶ事、楽しい事」を自からの手ですて上げる。決して他人まかせにしないで「子犬と遊ぶ」事ではじまり、「愛の心でかわいがり続け、ほめ続ける事」なのである。何の事はないだれにでも出来るような簡単な事では



左より母チヒ口、二郎、ボス、兄妹犬ナオ号

あるが、やり続けるところにそのむずかしさがあるのだ。

子犬育ての「心構え」こそが訓練に繋がる「い」の項であると言いたい事である。「思いやりの心」があり「やり遂げる根性」がありさえすれば、獵犬の訓練など何程の事があるうか。その目的は達成されたも同じである。大きな事を言う様だが、私は常々そんな事を自分に言いきかせ、心をふるい立たせ頑張っている。せめて目指した趣味である。その主役の猪犬訓練である。ここは一番夢は張りさける程、大きくふくらませて、なにかも楽しさにかえたい。その先に名犬のあるを信じて…



食事の時こそ教えのチャンスである

◎「ろ」は食事である

毎日与える「食」と「水」。これも必ず自分の手でやる事である。それも「はいどうぞ」ではためなのである。我が子や孫などに対すると同じ様に話しかけ気持を伝え、食事を機会に教えさとするのである。その中でも特に大切なのが「待て」であり「良し」である。子犬・成犬をとわず「食事は一番楽しい時であるから、このチャンスを生かして使うのである。良い事は「良し」、悪い事は「ダメ」と、きちつとくり返しくり返し教えこむのである。こんな基礎的な事をなめたら、その時点ですでにセルフハングリングの予想がつくのであり、



“花ざかり” 田宮系猪犬

帰りもまちがえなくおそい犬になるだろう。

この辺での教えが必ず獵野に立った時、役立つ事なのである。見事に主人の指示にのって狩り進む一流芸も、その基はこの子犬時にくり返し教えた事、つまり「待て」「良し」「ダメ」などの命令であり、絶対に必要な事なのであるが、多くの獵人は忙しさにまかせ、また気づかないうちにこの大切な子犬の成長期の訓練をみのがしている様に思うのである。

子犬でも成犬でもなでまわし話しかける、そして思いきって強く命令までもやれるのが楽しい食事の時であるのだから、妻に頼んだり、人まかせにしないで必ず自分

の手から与える事。これこそ最高のコミュニケーションだと心得るべきである。

私の場合、たとえば猪との戦で大ケガの富士雄号にあって「富士雄!! うまかったか、元氣を出せ:」明日またうまいのをもつて来るからな:」と話しかけながら薬を与えぬつてやり、自分がんでいるアクテージAN錠までのませる。ばかみたいではあるが、全身をなでまわし元氣付け「オシッコ」や「フン」の状況までみてやり、体調を見るのであるが、これも全て食事がらみである。こんなあたりまえの事を自分の手で毎日やり続ける。これも立派な訓練であり一流芸への道なのである。

◎仕上げ「ほ」びく事である

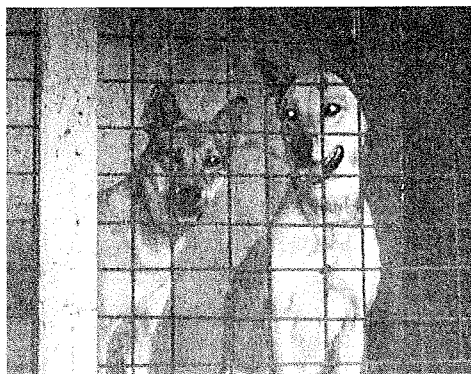
順番「は」さておき、子犬にとって次に楽しいのが「遊び」であり「散歩」だと思うのだが、私は猟犬の生涯はこれによって決まると思っている。そんな事から当然の事、これも自から手をかけ考えて成犬になっても続ける事なのである。どんな命令でも即きいてくれる愛犬にする為にはどれだけ手しおに掛けたかである。どんなに強い命令や指示でも、いやがらずに守

る様にする為には主人に対する子犬の信頼である。訓練はその信頼感を一本のひきづなにかけるのである。だからこそ信頼感をより深める様に、つなびきの時も全体的には「よしよし」であって、決しておこつてやらせるのではないと言う事である。

散歩の途中他犬との出会いの時、ほえついたりした場合やネコなどにとびかかろうとした時でも、ひきづな一本であやつるのであるが、こんな時は強めのダメである。それ以外はほのびのびと子犬まかせであるが、あくまでもひきづなの範囲の自由である。主人はやがてそのつなはなくなる事を肝に命じて知り置く事であり、上に立つたく



毎日自分の手でやり続ける



先犬ウルフ号と、最高の牝犬奈智号(左)



太郎号とテツ号「来期一軍」

り返しの訓練である。「まで!! 行け・来い」等を夢中で遊んでいの中で教え、さすとす事である。こうして習慣づけられた子犬はやがて猟野に出た時に、ひきづながある様な見事な行動をとるのである。つまり主人の思い通りにその指示にのり、狩り込み帰りまでも保証される一流芸の猪犬になるのである。

こんな大切な「ひきづな訓練」も、なあに:たいしてむずかしい事ではない。毎日10分でも15分でも良い。いつもの散歩道で語りかけながら:ほめて遊び、さとして教える事である。少し長めのひきづなをたよりに、のばしてやって「よしよし、行け!!」であり、ひき

よせなでまわし座らせて「よしよし、待て!!」である。その場が猪山でなくても、訓練所でもなくても子犬が主人の指示通り動く様に完成すれば、これで充分でありOKなのである。

何事でも同じであるが、この基礎になる訓練が一番大切な事なのである。子犬の時にこんなあたりまえの事をくり返し教えこむ事で、猪犬としての太い一本の基本線が入ったのである。この事は真に猪犬の一生を左右する大切な事になる。そのあとの訓練、つまり「一般に訓練」と言われる実戦や先犬につけてやるのは実は、この基本線をより太く確実なものにする実戦体験を重ねる事であるが、この

作業はここまで出来上っていれば「枝葉作りである」と私は思っている。

◎天性の素質をのばす訓練

子犬時にてまひまかけて、そこまで仕上げた若犬ならば「まず訓練らす事」の第一関門はすぎた事になる。くだい様だが、訓練の前につなびきしたり、山入りするのはダメ犬を作る事である。子犬時の基礎訓練は完全に信頼される主人になる事が大切であり、練習させるのはそれからの事になる。

若犬の実戦の訓練もまた子犬と同様に「信頼関係を大切にしたい」全体的には決しておこらず「にこにこで、よしよし」である。ただこの場合はよりきびしさも要求される事になり、いつもの散歩コースではなく、当然の事であるが実践するは山である。猪はいなくても良いが山でやるから山入りなのであり、「山まわり、山ぬけの」上手な犬にするのが「主題」であり、もって「帰りの良い犬」に仕込むのがポイントなのである。

この辺の考え方も実にさまざまであるが、私は猪に当てるのがこの時期の訓練ではないと思ってい

る。したがって猪に対面する事を大切に

大切にする訓練所が「名犬」にするのでも、猪との攻防をもって猪犬の「良し・悪し」がきまるのもない。「猪犬」とは猪猟全般にわたつての総合芸をもって評価されるのであつて、総合芸が申し分のないのが「名犬」なのである。

言うまでもなく「一流の芸」になるのは、その犬がもつて生まれた「天性のなせる技」である。主人が出来るとすればその天性を極限まで伸ばしてやる事である。言い替へれば教えようと思つても出来ない事だらけが実戦での訓練と

言う事になるが、この様に子犬時の基本訓練さえきちつと出来ていればなあに；あせる事はない。大げさに言えば獵期になつて猪の2、3頭も撃つてかませてやれば、

どんとんと覚えてくれるのである。撃ちとつた猪を恐れてかまわない様ならば「よしよし」と名前をよびながら「それ!!、行け!!」と猪をひっぱつて、励ますのである。

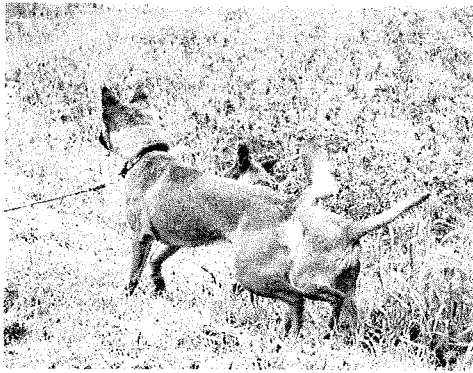
ひいている猪をおつかけパクリと行けば、それで大成功である。すでに死んだ猪には咬まない犬もあるが、ゆかない時でもあせらず、おこらず全身をなで、「よしよし」と一緒にとれたよるこびをさとし、ねらつているのはこの猪であ



野山に引きこむのが猪犬訓練の基本である

る事を教え、肉きれでも美味いものでも与えて、ほめちぎる事なのである。

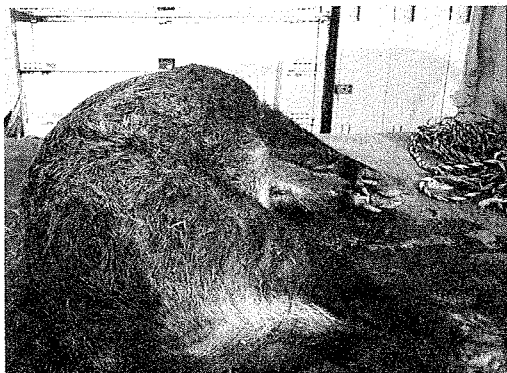
そんな訳で子犬の基礎訓練からすれば山でやる若犬の訓練は枝葉の完成である。「鉄は熱いうちに打て!!」と言われる様に、子犬時の訓練がいかに大切かを言いたいのであつてあえて「枝葉」と言ったのは、若犬の訓練は実に獵人の獵技術の全てを、気迫をこめて教える事なのであるが、どちらかと言うと「原石を磨き上げる」のが中心になる。愛情と気迫をこめ自らのもつているものを若犬にのり移すのであつて、あくまでも若犬のお手本は主人である。食事や遊びの中で得た信頼関係を基にくり



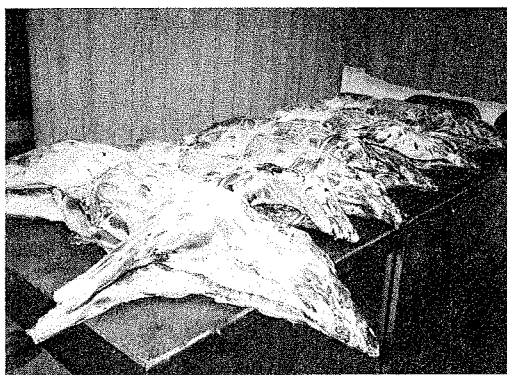
1頭は放して「ひきつな訓練」で。猪犬は「決まり」である。(左より二郎と竜)

返しくり返し若犬芸の完成を目指す事である。

基礎訓練が出来上がり「画竜点睛」とも言うべき若犬としての花が咲く幹であり、一流芸の中に秘



大猪!! とはこの位でないと(撃手, 石井氏(千葉県))



千葉の猪(石井考男氏のクラブでとれたもの)

められる大切な小技である「枝葉の訓練の完成」である。これこそがつかみずらく、教えずらい猪犬として一番奥の深いむずかしい訓練と言う事になるが、主人たるものどつしりとかまえて大猪を前にした時の様にあせらず、じつくりと信念をもって仕込む事なのである。どこまでも大自然の中で、自然体でくり返し教える事につきる。名犬を望むならば当然の事、教える事は実に多岐にわたり苦労や困難はつきものである。

そんな事からも獵人(主人)は、身を削って突き進まなければならぬのである。いろいろとどんなに訓練法を力説したところで猪犬

芸などと言うものは「1日にして成らず」であり、なかなか大変でその成果の出るのは何年もかかったり「真の成果」つまり思い通りの猪犬の完成には気の遠くなる様な長い年月が必要となる。

いづれにせよ出来る上る獵犬芸は訓練した主人の獵技術なみのものである。どんなに頑張っても御主人様の獵技を越える事はないと思っただ方がよい。当然の事であるが「獵犬の芸と主人の獵技術は」言っただけでは車の「両輪」の様なものである。片方が名人ならば当然もう片方も名犬と言う事になる。「このだめ犬が!!」ともし思い、腹を立てた獵人がいたとしたら:

そのだめ犬はだれであろう。それは鏡にうつった我が姿だと思ふ事である。そうすれば腹も立たないし、考えなおすきつかけにもなるはずである。反対にこれは素晴らしいとうなる芸をやつてのける猪犬のそばには、必ず名人であり名物獵人が堂々といるはずである。

そしてとりまきの獵友達もまた見事な技と心で結ばれているものだ。ともかくにも「訓練」などと言ふものは、獵人が心を入れ犬を愛し、我が技術の全てをつくり、手ぬきする事なく、何でもない当然の事を毎日やりとおす事なのである。そしてなによりも子犬にかけるあくなき探究心と挑戦以外道はないと思うのである。

なお訓練についての項目全般にわたつては省略するが、平成18年4月号の本誌84〜91頁にくわしく記述させてもらっているので、参考にして頂ければ幸いである。

最近私はつくづく「猪犬」を考へなおして見ると、単独猪犬で一番大切なのは安心して山にひけるおとなしい、少しシャイな犬である。危険がとなりあわせの獵場では「安全が第一」である。次に鳴き声のとぎれない犬である。

名犬とおぼしき猪犬は、ただ強

いだけではだめであり、普段はおとなしいが、ねばり強く切られても切られてもゆくが、決して他犬と「ケンカ」などのない人畜無害な、利口で俊敏な猪だけに強い犬である。特に単独獵犬の訓練のポイントには、深追えしないう犬。そして狩り進む時は見える範囲に、いつももある事が大切である。「深追えは百害あつても一利なし」である。

そして何よりも重要な事は、探し求めた子犬はその子犬を信じ、必ず生かして使う心構えが必要である。どんなに立派な犬群でも、その犬群のボスはだれであろう「自分」なのである。単独獵を見事咲かせるのは、まさに自分の腕にかかっているのである。その様な考へで、実戦出来る獵人ならば名犬もまたすぐそばに並び立っていると思うし、気がつけば我が愛犬は「名犬であつた」と言うように理想の実現をしみじみと感じるに相違ないと思うのである。

大好評、発売中!

銃器・火薬実用事典

税・送料込み価格、〇一五円

猟狗獵界社